

言語の命名に関する諸問題 —主に朝鮮半島の言語を巡って—

田林 洋一¹⁾

1) 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 言語・文化教育センター

1. 序 —高等教育機関では朝鮮半島の言語は どう呼ばれているか

日本の多くの大学には、「朝鮮語」や「韓国語」という科目名の授業がある。この科目名が冠せられた授業では、主に現在の朝鮮半島で話されている言語が教えられているわけだが、科目の名称に関して各大学の内部・外部でも諸々の議論があるようである。

旧帝国大学である国立7大学と東京外国語大学、及び東京都内の3つの私立大学を見てみると、「朝鮮語」として開講しているのは大阪大学、京都大学、東北大学、東京外国語大学、慶應義塾大学、早稲田大学（但し、早稲田大学エクステンションセンターでは「韓国語」の名称が用いられている）。「韓国語」としているのは北海道大学と九州大学。「韓国朝鮮語」としているのは東京大学と名古屋大学、「コリア語」と呼んでいるのが上智大学である。

大学入試の登竜門であるセンター試験では「韓国語」が試験として採用されている傍ら、検定試験には「ハングル能力検定」がある。1931年に発足した研究会は自らを「朝鮮語学会」と呼ぶなど（三浦・糟谷編（2000: 254））、当該言語の呼称は各大学や機関によってまちまちであり、一定していない。このことは即ち、「主に朝鮮半島に住む民（民族）によって話されている言語」を日本語でどう呼ぶべきかという問題に対して、万人が納得するコンセンサスが得られていないことを示唆する。

上の大学の例が示すように、現在、当該言語に対しては、「朝鮮語」「韓国語」「コリア語」「韓国朝鮮語」の他に「ハングル（語）」を加えた5つの呼称が

主に用いられているようである（専ら人口に膾炙しているのは「朝鮮語」と「韓国語」であろう）。英語では Korea、スペイン語では coreano、ドイツ語では Koreanisch、フランス語では Coreén とそれぞれ呼称するように、いわゆる欧米の言語における「朝鮮半島の言語」の捉え方にはほとんど混乱はない。母語話者たちの反応を見ると、北朝鮮では「朝鮮語」に相当する「조선말, 조선어（チョソンマル, チョソノ）」、韓国では「韓国語」に相当する「한국어, 한국말（ハングゴ, ハングンマル）」という呼び名が、それぞれ与えられている（後述する延辺朝鮮族自治州では「朝鮮語」と呼ばれており、どうやら「韓国語」は少数派に入るようである）。

ここで言う「朝鮮語」や「韓国語」を公用語としている地域は、韓国と北朝鮮の他、中国吉林省延辺朝鮮族自治州と、中国長白朝鮮族自治県の2つである（ここでの「朝鮮族」は、北朝鮮出身の朝鮮族だけでなく、韓国も含めた朝鮮半島全域の朝鮮民族を指しているだろう）。その他、旧ソビエト連邦のサハリン、ウズベキスタン、カザフスタンなどでも話されているが、これらの中央アジア地域では、「中央アジア韓国語」や「高麗語」という名前が好まれているようだ。ただ、高麗語は語彙・意味・音韻・文法などの点で朝鮮半島の言語とはかなり異なっており、「朝鮮語」とはほとんど別の言語である。文字体系も、高麗語ではハングルに加えてキリル文字も使われている。

ここで言及した高麗語は、朝鮮半島で成立した高麗王朝（918-1392）で使われていた言語を指し示していない（韓国では前期中世語と呼ばれている）。言語名と、

1) 連絡先：〒980-8576 仙台市青葉区川内 41 東北大学高度教養教育・学生支援機構
tabayashiyouichi@tohoku.ac.jp

少なくとも現在の地名が一致していない例は、後述するようにいくつも確認できる。

2. 朝鮮半島の言語の命名 —それ以外の言語も通した考察

それでは果たして、日本語では当該言語を何と、そしてどのように呼ぶのが適切なのか。上述の呼称を検討してみよう。

まずは「朝鮮語」という呼び方だが、この呼称はある意味で純粋に言語学的な正確性を備えている。朝鮮半島で用いられている言語だから「朝鮮語」と呼ぶのは論理的に見ても無理のない推論で、ちょうど日本で話されている言語を「日本語」と呼ぶように、言語名と地域名（「国名」は適当ではない）がほぼ正確に対応している。

もっとも、この分析はいささか性急である。「朝鮮語」の呼称は、言語名と民族名がリンクした結果かもしれないからだ。朝鮮半島には少数派の漢民族などを除けば朝鮮民族が大多数を占めており、彼らは主に「朝鮮語」を話している。仮に朝鮮民族が朝鮮半島から遠く離れた土地に定住したとしても、彼らの話す言語は「朝鮮語」と呼ばれうるであろう。日本で話されている言語を、大和民族になぞらえて「大和語」とは言わないかもしれないが、日本の一地域である北海道では、アイヌ民族が「アイヌ語」を用いている。「アイヌ語」という呼び名は、言語名と民族名が結びついている象徴的な例だろう。

地域名や国家名を言語名に反映させる、あるいはその逆の命名基準は極めて単純明快であるため、ある国家が社会的な混乱が少ない状態で樹立・存続している場合、言語の命名にはこの方法が採用される傾向にある。地域だけを近視眼的に見れば、フランス語、ドイツ語、ポルトガル語、フィンランド語、ルーマニア語、タイ語などは、国名と言語名が一致している例と言えるであろう。

当然のことながら、言語名と地域名が一致しないケースはある。例えば、エチオピアではアムハラ語が公用語であるが、これはエチオピア諸語の1つという捉え方をされており、「エチオピア語」と「アムハラ語」は同義ではない。そもそも、「エチオピア語」なる言

語があるかどうか議論の余地がある。

この意味で、池上（1984：104）が「エチオピア語にオノマトペがある」云々と言及するのは、社会言語学的に不適切な可能性がある。もっとも、エチオピア西半部から東部の一部にかけて広がるエチオピア高原は「アムハラ高原」という別称があることから、このケースにおける国名（エチオピア）と民族名（アムハラ族）は極めて近似的な意味の価値を備えていることになる。ということは、アムハラ語という言語名は国名からではなく民族名から取られていると推測される。

民族名と言語名が一对一で対応しているケースは、その他にユダヤ民族がユダヤ語（イディッシュ語）を話すなどの例がある。また、バングラデシュではベンガル語が使用されるが、国名（バングラデシュ）は言語名（ベンガル語）から派生したものである（「バングラデシュ」とは「ベンガル語を話す土地」の意である）。この場合、国名（バングラデシュ）は言語名（ベンガル語）から決定されていることになる。

その他に、言語名と民族名、国名の3者がほぼ同等の場合もある。例えば、ロシアは国名・民族名・言語名がほぼ対応しており、それぞれ「ロシア（ロシア連邦）」「ロシア民族」「ロシア語」と称される。完全に一致せずとも、国名、言語名、民族名は相互に影響を及ぼし合っていることが多い。例えば、フランスでは主にフランク族がフランス語を話す、というように、上記を前提にして命名行為が行なわれうるというのは無理のない推論だろう。

3. 命名につきまとう外延 —「朝鮮」という呼称

これらの観点からすると、「朝鮮語」は他の事例から見ても最も標準的であると言える。ところが、主に次の2点の理由から、特に韓国籍を持つ一部の人々は「朝鮮語」という呼び名を好まなくなった。1つは明治時代から日本の朝鮮半島統治を経て現在に至るまで続く「チョーセン」、及びそこから派生した「チョン」という語が、一部の人々に差別的だと受け止められたことである。この2つの語彙がどれだけ侮蔑的なニュアンスを持って発せられるのか、あるいは聞き手であ

る朝鮮民族がどれほどの被害者意識を受容するのか、話し手が本当に意図的な差別意識と攻撃性を持って発しているのかどうかなどは脇に措くことにする。ただ、「馬鹿でもチョンでも出来る」「バカチョンカメラ」などの言い回しがかつて定着していたことを鑑みると、何らかの卑近な外延的意味を持っていたことは間違いない。

面白いことに、同じ国籍の蔑称を用いた「ダッチワイフ」という語彙は、日本でもオランダでもかなりの寛容を持って迎えられているようだ。「ダッチ(Dutch)」はオランダ人に対する差別語とは言え、日本人にとってはその蔑称も、仮想的な性的快感を与える人形自体もそれほどポピュラーではない。それに加えて、オランダと日本は心理的にも物理的にも遠い国同士であることなどがその原因であろう。差別的語彙(現象)の例では、フィンランドでは「芸者チョコ」という名のチョコレートが販売されているが、仮に日本人がその隠された(娼婦という)意図を感じ取ったとしても、それほど気にかけるものであるとは考えにくい(もっとも、稲垣(1995: 258)は芸者チョコを食して、「チョコレートは甘くても、それを食べる時の気持はにがかった」と何ともやりきれない思いを述懐している)。

2つ目の理由は、朝鮮戦争に端を発した南北朝鮮の分断である。1948年の南北朝鮮の国家樹立宣言、それに続く1950年から1953年の朝鮮半島を二分した朝鮮戦争で、「北朝鮮・朝鮮民主主義人民共和国」と「韓国」の心理的な統一性や絆も一気に分断された。かつては同胞であった韓国と北朝鮮は敵対し、反目し合い、どちらかがもう片方のコミュニティに属していると誤解されることをひどく嫌った。結果、資本主義を標榜する韓国と近い日本は、北朝鮮と受け止められかねない「朝鮮」の呼称を避けるように韓国政府や韓国国民から要請されることとなった。

それ以外にも想定されうる理由はあるだろうが、おおよそ上記の事情から日本において「朝鮮語」は後退し、代わって「韓国語」と「ハングル(語)」が満を持して立ち現われてきた。ところが、この両者は程度の差こそあれ、言語学的に「標準の」命名方法に従っていない。まずは「韓国語」の検討に入ろう。

「韓国語」という呼称が不首尾との烙印を押されか

ねない理由は、その言語名が、当該言語を使用している地域・民族・人員・社会などを正確に反映していないからである。例えば、「韓国語」は韓国のテリトリーに属していない北朝鮮でも話されている。もちろん、方言的な違いは北朝鮮で話されている言語と韓国でのそれとでは豊穡に存在する(「李」は韓国語では「イ」と発音されるが、北朝鮮では「リ」である。また、正書法も南北の「朝鮮語」では多少異なっている)が、それでも言語的差異は極めて小さく、両国が「同じ言語」を用いていると国際社会は認識する。また、両者が意思疎通をする際に、それぞれが自分の言語を勝手気ままに話しても、コミュニケーションに大した支障はないだろう。

また、韓国という国家が樹立する以前の朝鮮半島の地で使用されていた言語が、果たして「韓国語」なのかという疑問も残る。「韓国」という名称が主に社会から偶発的・自然的・慣習的に生じたものではなく、国家などの権力保持機構が政治的背景の下に意図的に定めたものとするならば、「韓国語」の成立もまた人為的なものであるはずだからだ。実際、「韓国(大韓民国)」の名称は、当時朝鮮半島を占領していた米軍からの要請で、憲法起草委員会が1948年に採択したものである。政治的・人為的に成立した名称には必ず「成立年月日」、言うなれば「誕生日」が与えられることになり、その名称が付与される前の当該指示物は、また別の名前を持っていたか、あるいはそもそも名前を与えられる前は存在していなかったと推測される。

4. 様々な地域に存在する「言語命名問題」

だが、上記のような問題を抱える言語名は少なくない。例えばスペイン語は、ヨーロッパ南西のイベリア半島に存する「スペイン共和国」で話されている言語であるが、周知のように、それ以外にも公用語としてカタルーニャ語、ガリシア語、バスク語が用いられている。また、メキシコ及び中南米(いわゆるラテンアメリカ)の多くの国でもスペイン語は公用語の地位を獲得している。

更に「スペイン」という国家が成立したのが1492年のレコンキスタ終了時という定説があり¹、それ以

前のイベリア半島で話されていた言語は、厳密には「スペイン語」ではないということになる。実際、スペイン語には現在でも広く使われている地方名を冠したカスティーリャ語 (castellano) という別名があり、1492年にアントニオ・デ・ネブリハが著したスペイン語の文法書は『カスティーリャ語文法 (*Gramática de la lengua castellana*)』と銘打たれており、タイトルに「スペイン語 (español)」という単語は用いられていない。

もっとも、スペイン語がカスティーリャ語とも呼ばれるのには朝鮮半島とはいささか異なった事情がある。スペインはとりわけ地方の団結意識や独立意識が強く、中央政府（とそれに密接に関連する象徴的なマドリッド）に対する、地方（特にカタルーニャ地方とバスク地方）からの感情的な反発がある。彼らはスペインという国家に所属しつつ、カタルーニャ語を話すという状況ゆえ、彼らの言語ではないカスティーリャ語だけを「スペイン語」と呼称することに抵抗を感じるのだ。

同じくヨーロッパの主要言語でもあるドイツ語も似たような社会的背景を持つ。ただ、ドイツ語の場合は（少なくとも表面的には）ドイツ国内でスペインのような「国の代表の座を巡る」ないしは「地方と国家の威信をかける」類の言語紛争は起きていない。冷戦時代の分裂した国家においても、「西ドイツ語」や「東ドイツ」語という呼び名が登場することはなかった²。ドイツ語が問題になるのは、主に国外においてである。

スイスの北部と中央部ではスイスドイツ語（≒高地ドイツ語）、ベルギーの南部ワロン地域の北東のドイツ語共同体でもドイツ語が用いられているが、スイスやベルギーで話されているドイツ語を「スイス語」や「ベルギー語」と呼ぶことはない。そもそも、スイスの公用語はフランス語、ドイツ語、イタリア語、ロマンシュ語、ベルギーのそれはオランダ語（フラマン語）、フランス語、ドイツ語であり、固有の「スイス語」「ベルギー語」そのものが存在しない。これらはちょうど、例えばメキシコで話されている言語を「メキシコ語」と呼ぶことはなく、「スペイン語」と称することとリンクする。

このような例を出さずとも、日本人にとって身近な

英語（イギリスの言語）が、アメリカ（≒米語）、フィリピン、インド、オーストラリア、シンガポールなどで「英語」として話されていることを思い起こせば十分であろう。

逆に、ほぼ同一の言語であるのに、言語外的要因から別の名前を付与されるケースもある。ルクセンブルクで話されるルクセンブルク語は、言語学的にはドイツ語とほぼ同じ音韻・語彙・文法・意味体系を備えているが、ルクセンブルク人は自分たちの話す言語を「ドイツ語」とは認識しておらず、ルクセンブルク語だと考えている。そもそも、ルクセンブルク語がドイツ語に比べて比較的マイナーと捉えられているのは、言語的要因のためではなく、純粋に政治的な力学や国力の差異、話者人口の多寡のためである。ルクセンブルク人は、その意味でドイツ語におもねる必要はない。

ドイツ語とルクセンブルク語の関係に類似するものが、デンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語の3言語及びクロアチア語、セルビア語、ボスニア語の3言語である。これらの言語的差異は小さく、上記3つの言語話者は互いの意思疎通を、言語を変える（code-switching）ことなく無意識に達成することができるため、相互の関係はほぼ「方言」と判断されても良いくらいである。セルボ・クロアチア語からクロアチア語、セルビア語、ボスニア語が分離・派生したのは純粋に政治的・社会的要請であって、言語的差異からの原理的な理由からではない。いわゆる「イヌイット（諸）語」にも非常に多くの別名や下位分類があるが（三浦・糟谷（2000：247））、言語的にそれほど異なる特徴を有しているわけではない。その他にも、ポルトガル語はブラジルでも話され、「ブラジル・ポルトガル語」と称されるが、本質的な言語的差異はない。

一方、同じ言語名を冠していても、その違いが非常に大きいものもある。日本語の一部である琉球方言などは、日本におけるいわゆる「標準語話者」には理解が困難であろう。また、中国語に至っては地域差があまりに大きく、同じ「中国語」を話していても、話者の出身地域に絶望的な差があれば、相互理解はまず不可能である。

5. 「朝鮮語」命名再考 ―不適切な「ハングル（語）」

ここまで、言語名が地域名を凌駕するケース、逆に地域名によって（ほぼ）同一言語が分断されるケースを見てきた。以上の国際的状況を踏まえて、朝鮮半島の言語問題を改めて考えてみよう。まず、北朝鮮は自分たちの言語を「北朝鮮語」とは呼ばず、単に「朝鮮語」と呼ぶ。更に、彼らは南朝鮮（≡韓国）で話される言語を「南朝鮮語」とは捉えず、朝鮮半島全域の言語を全て「朝鮮語」と見なしている節がある。

この意味で、北朝鮮がたとえ政治的に韓国と対立しようと、少なくとも民族的・言語学的には同類で「同胞」なのである。一方、韓国人は英語でこそ Korea（≡朝鮮人又は朝鮮語）と表記するものの、日本語及び日本社会では上記の理由（第3節参照）から「朝鮮語」や「朝鮮人」を嫌い、「韓国語」「韓国人」と表現してほしいという要望を持っている。

日本は上記の韓国人コミュニティの要求に苦慮した。特に言語講座を定期的に提供する NHK は、政治的公正（political correctness）の建前の下、どのように当該言語を呼称すべきか、活発な議論が繰り返された。最終的に妥協の産物として生まれたのが、2008年に誕生した「ハングル講座」である。

「ハングル講座」は言語学的に見ても極めて歪な名称で、はなはだ不正確かつ不適切と言わざるを得ない。まず、周知のように「ハングル」は文字名であり、言語名ではない。従って、この講座名はちょうど日本語における「平仮名講座」や「片仮名講座」と同等の価値しか有していない。だが、この番組はハングルという文字の仕組みや規則、歴史などだけを講義するのではなく、主に朝鮮半島で話されている言語全体も扱っている。

もし「ハングル講座」においてハングル文字のことしか扱っていなかったとしたら、視聴者は奇異に思い、不満を抱くに違いない。本来ならば「ハングル講座」は、ハングル文字のみを扱うべきなのに、である。実際のところ、少なくともこの場合においては、言語は文字よりも射程が広い³。それなのに敢えて適用範囲の狭い語、即ち専門性や詳述度が高い語彙を使うからには、それなりの理由がなければならない。

即ち、「韓国語講座」でハングルを扱う分には全く問題はないが、厳密な学術的考証の下では「ハングル講座」において「ハングル文字以外の事項」を講義することは、羊頭狗肉ならぬ「狗頭羊肉」であることになる。受講者は「ハングル講座」で、当該言語の会話問題が出題されたら、狭義的にはそれを拒否する権利を持っていることになる。「ハングル講座」なる珍奇な名称は、言語学的に問題があるばかりでなく、実態も正確に反映していないのである。

仮に「ハングル」が朝鮮半島における言語を包括していたとしても、まだ問題は残る。ハングルは1446年に李氏朝鮮第4代国王の世宗が「訓民正音」の名で公布した文字だが、先に言及したように、1446年以前の朝鮮半島の言語をどのように呼ぶべきか、定かではない。また、そもそも「ハングル」という名称がこの文字に使われるようになったのは1900年代前半以降で、更に「ハングル」の「ハン」が「韓（≡韓国）」を表しているという説もある。となると、政治的中立を目指していたはずの「ハングル」が、実は韓国（南朝鮮）に肩入れしてしまうという可能性もある。

更にまずいことに、出演スタッフがどうしても言及しなければならなくなった時には、この番組内で教授されている言語を、「この言語」と呼んでいたようである。「この言語」とは一体どの言語なのか、指示対象が明確化されていない限り、直示表現「この」は（少なくともこのケースにおいては）意味をなさない。現在では「この言語」の代わりに単に「ハングル」を使用しているようであるが、それでも出来るだけ当該言語の呼称を避けようとしている節がある。国家間の政治的な問題が、語学番組の正確性すらも犯す事態になったのである。

6. 結語 ―妥協的な代替案

このように「ハングル（語）」という名称が大いに不適切であることは疑問の余地はないが、その代替案を示すのは容易ではない。東京大学や名古屋大学に倣って「韓国朝鮮語」と両者を併記するのは無難な解決策の1つではあるが、「韓国」と「朝鮮」のどちらを先に置くかという新たな問題が浮上する。「韓国朝鮮語」は韓国の朝鮮語を含意しうるし、「朝鮮韓国語」

は、「朝鮮韓国」という別の共同体や社会を我々に喚起させかねないからだ。また、そうでなくとも、地域名などにおける「どちらを先に表記するか」問題は、話し手が持つその対象への重要度・新密度・関係性の強弱などの要因が関係する。日本のニュースで「日米韓3カ国協議」と言われるのは、日、米、韓の順に日本国への影響が大きいことを表しており、「韓米日3カ国協議」が日本在住の日本人に極めて奇異に映るのはそのためである。

とどのつまり、かなり回避的な選択ではあるが、日本では朝鮮半島の言語を「コリア語」と記述するのが一番無難なようである。コリアは「朝鮮」を意味するにもかかわらず、何故か韓国人は「コリア」や Korea には拒否反応を示さない。同様に、中国（人）が英語の China には嫌悪感を抱かないが、そこから派生した日本語の「シナ」や「支那」には眉を顰めることが多い。実際、多くのワープロソフトなどでは、「白痴」や「気違い」などと同じく、「支那」は一発で変換されないようになっている⁴。日本語の中国人への侮蔑語として「チャンコロ」というのがあるが、恐らく「シナ」はそれを連想させるためだと思われる。

それはともかく、「コリア語」は未だに人口に膾炙しているとは言い難いが、それでもこの語を援用する教育機関は増えている。前述の上智大学の他、帝京大学や文教大学、同志社大学、大東文化大学、東海大学などでも用いられており、徐々に市民権を獲得していると言える。特に上智大学は、外国語学部やイエズス会の影響もあってか、「スペイン語」の代わりにスペイン以上の地域・地方・年代を包括しうる伝統的な「イスパニア語」という名称を用いるなど、この手の問題に関して徹底的に配慮しているように見える（「イスパニア語」と銘打つ大学は、他に神戸市外国語大学などがある）。

当然のことながら、「コリア語」は英語から引き写した外来語であり、その意味で「純国産品」ではない。それでもコリア（Korea）は広く朝鮮半島を含意し、かつ被差別的な言外意味を当事者に引き起こさない。だが、前述のように、言語名と地域名・民族名・国家名などが過不足なく一致するケースはまずない。本稿での提案は、言語問題を解決できないがゆえの妥協の

産物である。

こうした言語呼称に関する諸問題は、朝鮮半島だけでなく世界中の様々な言語で起こっている。そこには言語内部の問題、即ち純粹に狭義の言語学的要因だけでなく、政治的・民族的・経済的・社会的な言語外的力要素が複雑に絡み合っているのは既に見た通りである。言語の命名に関しては、コリア語に限らず、今なお議論の余地のある、そして永遠に解決し得ない政治的・文化的・言語学的な問いであると言えよう。

参考文献

- 池上嘉彦. 1984. 記号論への招待. 岩波新書.
稲垣美晴. 1995. フィンランド語は猫の言葉. 講談社文庫.
三浦信孝・糟谷啓介編. 2000. 言語帝国主義とは何か. 藤原書店.
太田直子. 2007. 字幕屋は銀幕の片隅で日本語が変だと叫ぶ. 光文社.

註

- 1 その他、カトリック両王（Reyes Católicos）が成立した1469年という説や、極端な意見では1700年のフェリペ5世の即位に始まるブルボン朝成立をスペイン国家誕生とする説もある。
- 2 これは、ベトナム戦争当時にも、「北ベトナム語」や「南ベトナム語」という呼び名がなかったことと平行している。
- 3 文字の方が言語よりも射程が広い場合も当然ありうる。例えば、キリル文字はロシア語だけで用いられているわけではなく、ブルガリア語やモンゴル語などでも使用されているので、一概に「キリル文字はロシア語の下位区分」とは言えない。
- 4 この指摘は太田（2007: 124-5）を基にしている。